

成鶏にみられた動脈壁の黄色腫症

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題

第12回獣医病理研修会標本 No.175



動物は、成鶏の雌、白色レグホン種である。急死したとのことで研究室に持ち込まれた。従って、生前所見は不明である。唯、数千羽から成る1鶏群に、本例の1羽が偶発し、市販の配合飼料が供与されていたということが知らされた。

肉眼的な変化は、大動脈を除くほぼ全身の、肉眼可視の動脈に認められた。それは、動脈壁の顕著な肥厚と淡黄色化であった。肥厚は、おおむね均一であったが、一部の動脈では念珠状を呈していた。

組織学的検索は、全身にわたって行なった。その結果、病変は、大動脈と中枢神経を除く、ほぼ全身の筋型動脈に認められた。その病変は、血管の大、小により、やや趣を異にしていた。すなわち、中、小の動脈（図左：心筋内動脈、エラスティカ・ワンギーソン染色、 $\times 253$ ）では、内膜、中膜、外膜全壁にわたって（中膜にもっとも高度）泡沫細胞（黄色腫細胞）が出現し、この泡沫細胞から成る集団には、屢々針状結晶が認められた。泡沫細胞が集簇した部の内弾性板及び外弾性板は、屢々崩壊消失していた。中口径の動脈では、内膜は、さらに線維性肥厚を示し、血管腔の狭小化を招いているものもあった。また、中口径の動脈の中膜において、時折、巣状に物質欠損部がみられ、粒状ないし小塊状の石灰沈着巣も散見された。

一方、大きい動脈（図右：坐骨動脈起始部、エラスティカ・ワンギーソン染色、 $\times 50$ ）では、内膜と中膜の変化が高度であり、外膜はほぼ正常であった。すなわち、内膜は高度に肥厚し、線維性細胞の増殖が強く、かなり多数の泡沫細胞の出現を伴っていた。そしてさらに、内膜の概して深層部においてであるが、針状結晶を伴った、壁組織の膨化ないし壊死巣が、限界不明瞭な層状部として認められた。中膜は、屢々広範にわたって、針状結晶を伴って膨化、壊死に陥り、粒状ないし小塊状の石灰沈着も散見された。しかし、内弾性板、外弾性板は、共にほぼ健常であった。

今回の例についての血管病変を総括すると次の通りである。病変は筋型動脈にみられ、その性状は血管の大、小により若干異なっていた。すなわち、中、小の動脈では、概して泡沫細胞の出現が優勢であり、しかもそれは、内膜、中膜に高度であった。一方、大きい動脈になると、内膜の線維性肥厚、内膜、中膜の粥腫性変化が目立っていた。しかし、泡沫細胞の出現も少なくなかった。

以上の所見から、本病変を動脈壁の黄色腫症と診断した。この診断に対しては、動脈硬化症との関連が当然問題となるであろうが、全身の動脈における優勢な泡沫（黄色腫）細胞の出現を重視した次第である。